

# 日本文化部会

## 【概要】

高橋喜子\*

### 1. はじめに

第11回国際日本学コンソーシアム日本文化部会は、2016年12月13日、お茶の水女子大学人間文化創成科学科・全学共用研究棟6階大会議室において開催された。「はたらく／あそぶ」というテーマのもと、7人の報告者による研究発表が行われた。以下、各報告の内容と質疑応答について概要をまとめる。

### 2. 潘蕾（北京外国語大学北京日本学研究センター）「遊戯から芸道への道のり—院政時代の蹴鞠文化に関する一考察—」

中国の蹴鞠と日本の蹴鞠の比較を行った上で、日本の蹴鞠が遊戯から芸道へと変化していく道のりを考察した。中国における、蹴鞠は当初、軍事訓練の一環として行われていたが、その後、庶民、宮廷へと広まった。しかし、明の洪武帝の時代に軍隊での蹴鞠が禁止され、さらに一般民衆へも影響が及び、次第に中国における蹴鞠は衰退していく。他方、日本における蹴鞠は、文武天皇の時代、大宝元年（701年）頃から始まった。日本の蹴鞠は中国の白打と似ているという。娯楽性や技術性が重んじられ、院政時代には天皇や上皇の庇護のもと、蹴鞠の名手・達人が生まれる。13世紀に入ると競技としての洗練度が高まり、装束や作法等の様式が整えられ、蹴鞠道の家が成立し、それが現代まで受け継がれている。質疑応答において、日本では軍事訓練としての意味はないのかと

いう質問があり、日本ではそうした意味合いはなく、仏教とともに伝わったとされているという回答がなされた。

### 3. 大薮海（本学教員）「『洛中洛外図屏風』に描かれた中世京都の商人と職人」

中世京都にはどのような商人や職人が存在したのか、大薮氏は『洛中洛外図屏風』を読み解くことで、その疑問を明らかにしようとした。現存する『洛中洛外図屏風』は100点以上あるが、そのうち中世のものは4点のみである。このうち最古のものとされる『洛中洛外図屏風歴博甲本』を取り上げ、そこに描かれた商人や職人の姿を検討し、実に多様な商人・職人が中世京都に存在したことを明らかにした。そして、文献史料と絵画史料の両方を用いることで、歴史の実像へ迫ることの必要性を説いた。質疑応答において、振売、見世棚などは座の枠組の中にあるのかという問いがなされた。それに対し報告者は、座は商業活動を円滑に進めるためのものであり、上納金を納めさえすれば営業に対する規制はないと回答した。

### 4. サイジ・モンテイロ ダニエル（パリ・ディドロ大学院生）「唐土と南蛮の交錯—近世日本の宇宙観を巡って—」

西川如見の天文学・暦術の著書『天文義論』と『両儀集説』を検討し、近世日本の宇宙観を考察した。近世日本における天文学は、占い技術と密接に結びついており、陰陽五行説に則って解釈することができる。また、道教、仏教、儒教、朱子

\*お茶の水女子大学院生

学などの思想も日本人の思考に大きな影響を与えており、そこに南蛮・蘭学系の宇宙観が加わったことで、近世学者の思惟は非常に複雑なものとなった。近世日本の天文学者にとって、宋学的な自然哲学と西欧の天文学・地理学の技術は相容れないものではなく、共存するものと考えられていた。しかし一方で、西川の著書にもみられるように、陰陽五行説に固執する面もあり、西欧科学の技術は認めても、根本的な道理には至らない浅薄な知識と考えられていたという。

#### 5. 柳澤京子（本学院生）「戦時下の労働者—長州戦争と地域社会—」

幕末日本の長州戦争（幕府と長州藩との戦争）、その戦争の長州側の戦闘員として、多くの労働者が動員された。戦闘員となった労働者は武士ではなく、長州領内で様々な労働に従事する民衆であった。彼らは戦闘参加にあたり、武士で構成される藩正規軍とは別の「諸隊」と呼ばれる集団に所属した。どのような者たちが戦闘員として戦争に参加したのか、炭鉱関係者、塩業関係者、廻船従事者を取り上げて戦争との関わりを検討した。戦闘に参加した労働者を分析することで、藩正規軍とは全く異なる「諸隊」の特徴を描き出した。長州藩では石炭と塩の生産が重要となっていたが、具体的にはなぜ必要かという質問に対し、石炭業や塩業が地域経済を支えていたと説明した。

#### 6. ルチエ・モルンシュタイノヴァー（カレル大学院生）「近代における被差別民の社会的な地位—日本とヨーロッパの簡略比較—」

江戸時代の日本と近代のドイツにおける被差別民の社会的地位と生活条件を比較し、被差別民が置かれた立場について、日本とドイツにおける差異や共通点を明らかにした。会場からの意見として、日本の被差別民に関しては実態的な研究が進んでいるが、報告においては法的な側面のみが紹介されており、法、社会、両方の側面からみた方

が研究に膨らみが出るのではないかという指摘があった。また、グローバルヒストリーという観点から比較研究に対する評価の声も上がった。

#### 7. 馬場幸栄（比較日本学教育研究センター研究協力員・国立民族学博物館）「緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会」

奥州市水沢に設置された緯度観測所の初代所長である木村栄の天文学者としての活動を紹介した上で、観測所に隣接する駒形神社の宮司當山亮道とともに木村が立ち上げた「水沢宝生会」について、地域住民との関係に注目しながら考察した。木村が水沢宝生会を設立した背景には、自身の芸術活動に対する関心だけではなく、長らく臨時のままであった観測所への支援を得る意図もあったのではないかと述べた。

#### 8. マーティン ジュリアン（パリ・ディドロ大学）「日本における高齢者雇用と人事管理」

現在、先進各国では少子高齢化が進み、その対応策が模索されている。少子高齢化先進大国日本が抱える高齢者雇用の課題と施策を研究し、先進諸国が抱える問題解決の一助とすることが本報告の目的である。結論として、雇用対策による高齢者雇用率の上昇、雇用形態に関わる法的整備、年齢に関係ない人事管理が求められていると述べた。会場からは、高齢者の雇用（60歳以上）と中高齢者の雇用（40～50歳）が区別されずに扱われているが、高齢者と中高齢者の問題は別に考えた方がよいのではないかと指摘があった。それに対し報告者は、指摘の通り両者は違うと考えるが、今回は定年後の雇用者という問題に注目して検討したと回答した。

#### 9. おわりに

今回のコンソーシアムのテーマは、「はたらく／あそぶ」であった。報告者それぞれの研究を軸としつつも、「はたらく／あそぶ」という視点

から報告がなされ、いずれも大変興味深い内容であった。取り扱う時代について、図らずも古代から現代までの報告が揃ったことで、通史的に問題を考えることができた。質疑応答も活発に行われ、有意義であった。「はたらく／あそぶ」ということは、いつの時代も人間の根源的な活動であることを改めて感じた次第である。